

J. Hubbard・P. L. Swanson 編 *Pruning the Bodhi Tree*

ジヨアキン モンテイロ

一 はじめに

書評そのものに入る前に、本書の『菩提樹を刈り込む——批判仏教の嵐』の成立背景と内容記述の紹介をしておこう。一九九三年十月一日 Washington, D. C. で行われた“Critical Buddhism (Hihan Bukkyō) : Issues and Responses to a New Methodological Movement (批判仏教——ある新しい方法的運動の諸課題及びそれに対する反応)”という北米宗教学会のパネルディスカッションが本書の背景である。

以上で背景を明らかにしたので、次に内容の記述に入ろう。本書は三部によって構成されたものであり、そして、袴谷・松本二氏の代表的な論文の英訳とそれに応答する諸学者の論文によって成り立っている。本書は次のように構成されているのである。

PART ONE — The What and Why of Critical Buddhism
(第一部・批判仏教のなにかとなぜか)

● Paul L. Swanson — Why They Say Zen Is Not Buddhism : Recent Japanese Critiques of Buddha-Nature (「彼らがなぜ禅が仏教ではないと主張するのか——日本における最近の仏性批判」——*Numen* 40 (1993) に掲載された Paul L. Swanson 氏の“Zen is Not Buddhism : Recent Japanese Critiques of Buddha-Nature”の再編およびその論文は外国の批判仏教を初めて紹介したものである。)

● Dan Luthaus — Critical Buddhism and Returning to the Sources (批判仏教と資料への回帰——書きおろし)

● Hakamaya Noriaki — Critical Philosophy versus Topical Philosophy (Jamie Hubbard 氏による「批判仏教序説——批判の哲学」対「場場の哲学」『批判仏教』三—四六頁の英訳)

● Jamie Hubbard — Topophobia (場所への恐怖——書きおろし)

Yogacara and *Tathāgata-garbhā* Texts (実修行派及び如来藏思想論文集) の Dhātu-vāda の概念 — 書名(なご) (1994) の再編。

● Hakamaya Noriaki — Scholarship as Criticism (Jamie Hubbard 氏による「批判としての学問」『批判仏教』九二—一五四頁の英訳)

● Paul J. Griffiths — The Limits of Criticism (批判主義の限界 — 書名(なご))

● Matsumoto Shirō — Comments on Critical Buddhism (批判仏教に関する私見 — 『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五二号に掲載された“My Report of the Panel on Critical Buddhism”の部分的再編)

PART TWO — In Search of True Buddhism (第二部・正しい仏教を求めて)

● Matsumoto Shirō — The Doctrine of *Tathāgata-garbhā* Is Not Buddhist (Jamie Hubbard 氏による「如来蔵思想は仏教にあらず」『縁起と空 — 如来蔵思想批判』 — 一九頁の英訳)

● Sallie B. King — The Doctrine of Buddha-Nature Is Impeccably Buddhist (仏性思想は無欠の仏教である — 書名(なご))

● Yahabe Nobuyoshi — The Idea of *Dhātu-vāda* in

● Matsumoto Shirō & Yamabe Nobuyoshi — A Critical Exchange on the Idea of *Dhātu-vāda* (*Dhātu-vāda* の概念に関する批判的交換 — 書名(なご))

● Yamaguchi Zuihō — The Core Elements of Indian Buddhism Introduced into Tibet: A Contrast with Japanese Buddhism (チベットに伝承されたインド仏教の中心的な様相 — 日本仏教との対比 — 書名(なご)の英訳)

● Matsumoto Shirō — The Meaning of “Zen” (禪の意味 — Paul L. Swanson 氏による「禅思想の意義 — 想と作意について」『禅思想の批判的研究』 — 一八五頁の部分的な英訳)

● Steven Heine — Critical Buddhism and Dōgen’s *Shōbōgenzō*: The Debate over the 75-Fascicle and 12-Fascicle Texts (批判仏教と道元の『正法眼蔵』 — 七五巻本と十二巻本に関する論争 — “Critical Buddhism (Hihan Bukkyō) and the Debate concerning the 75-Fascicle and 12-Fascicle *Shōbōgenzō* Texts” *Japanese Journal of Religious Studies* 21 (1994) の再編。

● Peter N. Gregory — Is Critical Buddhism Really Criti-

cal? (批判仏教は本当に批判的なのか—“Tsung mi and the Problem of *Hongaku Shiso*” 『駒澤大学禅研究所年報』第五号 (1994) 一一五〇頁の部分的再編)

● Lin Chen-kuo — Metaphysics, Suffering, and Liberation: The Debate between Two Buddhisms (形而上学、苦悩と解放—二つの仏教間の論争—書きおろし)

● Takasaki Jikido — Thoughts on *Dhātu-vāda* and Recent Trends in Buddhist Studies (Paul L. Swanson 氏による「最近十年の仏教学—仏教思想学会発足十年に因んで」仏教学三六号(1994)一一一八頁の部分的な英訳)

● Sueki Fumihiko — A Reexamination of Critical Buddhism (批判仏教再検討—書きおろし)の英訳)

PART THREE — Social Criticism (第三部・社会批判)

● Hakamaya Noriaki — Thoughts on the Ideological Background of Social Discrimination (Jamie Hubbard 氏による「差別現象を生み出した思想的背景に関する私見」『本覚思想批判』一二四—一五八頁の英訳)

● Matsumoto Shirō — Buddhism and the Kami: Against Japanism (Jamie Hubbard 氏による「仏教と神祇

—反日本主義的考察」『縁起と空—如来蔵思想批判』九九—一一九頁の英訳)

● Ruben L. F. Habito — Tendai *Hongaku* Doctrine and Japan's Ethnocentric Turn (天台本覚思想と日本の自民族中心主義的逆転—書きおろし)

● Matsumoto Shirō — The *Lotus Sutra* and Japanese Culture (「法華経と日本文化に関する私見」『駒澤大学仏教学部論集』第二一号(1990)三二六—三三五頁が再編され University of British Columbia, 27 August, 1990 で発表されたもの。Paul L. Swanson 氏による英訳)

以上の構成からよく推理できるように本書における批判仏教の紹介は単なる記述にとどまらないでその本質的な思想的課題のほとんどを追及しているのである。それらの思想的課題のすべてを十分に論じることが不可能に近いように思われるけれども、私はここでその前提だけを明らかにしたいと考えている。批判仏教の論理的前提及び方法論を問題にするにさいして、仏教そのものを問題にする論理的領域(仏教学・宗学)と、社会及びその他の思想・宗教との関係を問題にする論理的領域(哲学・キリスト教神学・社会科学等)を厳密に区別する必要があると考えられる。なぜなら、批判仏教は、文献批判及び論理的考察を通して仏教の特有の論理性を明らかにすると共に、ある一種の積極的な論理的主張に基づいて他の思想・宗教との対話(または、対決)及び現実社会への

批判を展開することを本質としているからである。この前提に基づいて本書における方法論的考察を問題にする」と Paul L. Swanson 氏と末木文美士氏の優れた分析が必然的に問題となる。批判仏教の論理的内容を二つの次元(仏教学的・宗派的・社会批判的)に即して問題にしている P. Swanson 氏³⁾に対して末木氏は哲学的な次元をも問題にしているのである。哲学的な次元の存在は批判仏教にとって本質的なものであると共に、この次元を明確に認めることは先述の領域上の区別をはっきりさせるために有意義に働く。私には考えられるが故に末木氏のこの分類のあり方を支持したいと考えている。批判仏教を成り立たしめている四つの次元の内容は次のようなものである。

● 哲学的次元 — この次元は「批判の哲学」と「場所の哲学」との対立を中心テーマとしているのである。つまり、R. Descartes (1596—1650) によって確立された「批判の哲学」は言葉を通じた論証によって真偽・正邪を二者択一的に選び取ることが本質として「いることに対して」 Giambattista Vico (1668—1744) によって主張された「場所の哲学」は自明なる(場所)を前提とする「発見の技術」をその本質としている。仏教はその本質において一種の「批判の哲学」であるとすると袴谷氏の主張は、仏教の特有の論理性を明らかにし、仏教と西洋の哲学との関係を問題にすることに關して大きな意味を持っていると私には考えられる。

● 仏教学的次元 — 仏教の縁起を一種の宗教的時間性として了解することによって如来蔵思想は仏教ではありえないことを主張す

る松本氏と、『大乘起信論』に由来する本覚思想を同様の根拠に基づいて批判する袴谷氏の主張はこの次元の中心テーマをなしているのである。

● 宗派的次元 — 道元に思想的な変化の存在を認め、七十五巻本『正法眼蔵』には本覚思想がまだ認知されていたことに対して、晩年の道元の思想を代表する十二巻本『正法眼蔵』には本覚思想への批判が充分に成立していたという袴谷氏の主張はこの次元の中心テーマをなしている。この問題提起は曹洞宗の内部から初めて指摘されたことには大きな意味があるが、その内容は日本仏教教団のすべてに対して大きな意味を持っているのである。

● 社会批判的次元 — 本覚・如来蔵思想はその本質において差別思想であり、戦争を肯定する思想であるという袴谷・松本二氏の共通の主張はこの次元の中心テーマをなしている。この次元において仏教そのものの批判的な検討は初めて現実社会への批判として展開するのである。

最後に、本書における批判仏教への検討に対する私の分析のあり方について一言を加えておきたい。私は、道元の研究者ではないため、宗派的次元の問題には積極的に触れることができない。この次元に対する Steven Heine 氏の優れた分析が道元研究者の誰かによって検討されるならば誠にありがたいと考えているが、この検討は明らかに私の力を超えているものである。私は、その意味で哲学・仏教学・社会批判の三つの次元に限定し、反論者の意見を重

要視する検討のあり方を取りたいと考えている。

二 哲学的次元への分析

批判仏教における哲学的次元とは、袴谷氏が主張するところの〈批判の哲学〉と〈場所の哲学〉との対立を中心テーマとするものであるが故に袴谷氏の思想を中心に分析を行うことは当然な帰結であるように考えられる。私は、この分析を十分に展開できるかどうかという点に関して大きな不安を感じているけれども、この責任を引き受けなければならぬと考えている。なぜなら、袴谷氏は私の仏教理解に関する一番決定的な影響を与えた人であるだけではなく、思想そのものに対する私の根本的な態度に関しても一番決定的な影響をもったからでもある。それにもかかわらず、私は袴谷氏のこれまでの思想表現に関して多くの疑問を覚えているので、それらの疑問は表現の問題と関係するものなのか、思想そのものの論理的対立によるものなのか、いずれであるかを確認したいと考えている。袴谷氏が主張するところの〈批判の哲学〉に対しては確認すべき三点があるように考えられる。その一つは、西洋哲学における〈批判の哲学〉の位置づけの正確さの問題である。もう一つは、仏教思想そのものとの関連の論理的必然性の問題である。最後に、社会批判や社会実践の次元と深く連関する人権・民主主義のような理念との関係の必然性の問題である。西洋の哲学における〈批判の哲学〉の根本的な位置づけの問題に就いては、私は袴谷氏の〈批判の哲学〉の規定のし方を本質的に支持しているけれども、少なくともこれまでの思想表現には論理的に困難な側面を感じているのである。私は袴谷氏の思想を十分に了解している

つもりがないけれども、袴谷氏における批判の哲学の規定には〈批判の哲学〉を確立した R. Descartes の哲学の思想的な位置づけとデカルト主義の体系的な内容との区別の欠落があり、それが論理的困難さの真の原因であるような感じがする。こうした区別の欠落は、多くの誤解を生み出していると私には考えられる。つまり、R. Descartes が、西洋の哲学史において一種の不可逆的な線を引いたことは間違いないけれども、その体系的な内容には本質的な問題があることも確かである⁵⁾。私はここでデカルト主義の体系的な内容のすべてを問題にすることはできないが、その〈主観中心の合理性〉の概念が一番中心的な論点だと考えている。なぜなら、その〈主観中心の合理性〉には問題があるに違いないが、その克服の方向が現代の哲学の中心的な論点になっているからである。つまり、〈主観中心の合理性〉を〈対話的理性〉の方向へ克服し、〈批判の哲学〉の中心的特徴である言葉を通じた論証を他者との対話の中で位置づけることが Jürgen Habermas の批判理論の立場であることに對して、理性そのものの否定によって〈主観中心の合理性〉を克服することがいわゆるポスト・モダン哲学の立場である⁶⁾。その意味では、R. Descartes における〈批判の哲学〉の確立の思想的意味とデカルト主義の体系的な内容との区別に基づいて〈批判の哲学〉の厳密な定義が明確になれば、〈場所の哲学〉やポスト・モダンに対する袴谷氏の批判の真の意味が充分に明らかになりうると私には考えられる。

仏教はその本質において一種の〈批判の哲学〉であるとする袴谷氏の主張に関して、私は根本的に共感的である。その主張の思想的な位置づけも充分に可能であると考えている。私の研究の対象

である『成実論』及び成実論師から考えれば、〈批判の哲学〉と〈場所の哲学〉との対立とは、成実論師が主張していたところの〈約理の二諦〉と、三論学派が主張していたところの〈約教の二諦〉との対立として仏教思想史において十分に位置づけられると考えているのである。なぜなら、〈約理の二諦〉においては、俗諦とは凡夫のあり方を代表するものであるのに対して、第一義諦とは仏のあり方を代表するものである。その意味でいえば、邪分別を代表する俗諦と、正分別を代表する第一義諦とは論理的に二者択一的な関係にある。さらにいえば、〈約理の二諦〉においては、俗諦と第一義諦との関係は不可逆的なものである。これに対して、〈約教の二諦〉においては、二諦とは同価値のものとして見られていることによつて論理的な二者択一性が放棄されているし、二諦とは〈理〉を悟らしめるための方便として了解されているが故に時間的な不可逆性も否定されているのである。結論的にいえば、〈批判の哲学〉と〈場所の哲学〉との対立とは、仏教思想史の中において〈約理の二諦〉と〈約教の二諦〉の対立として十分に位置づけることができると考えられる。

最後に、〈批判の哲学〉と人権・民主主義との関係を問題にしておこう。私に見れば、いわゆる〈主観中心的な理性〉に立脚した〈社会契約論〉には、〈自然権〉という非時間的、超歴史的な概念に基づいて人間の本質的な歴史性を放棄してしまう大きな欠陥があると考えている。さらにいえば、その超歴史的な性格によつて人権の内容をいわゆる〈自由権〉に限定することによつて〈社会権〉を放棄してしまう極めて危険な側面を持っている。これを理由にして、この人権論に対して厳しい批判が見られるのである。その中

で人権思想そのものを否定する危険な傾向が今日において強烈に表れている。私に見れば、人権思想とは放棄してはいけないものであるけれども、新しい人権のあり方が求められているのである。その代表的な一例として、社会契約論の個人主義的なあり方を克服して、それに基づいて自由権と社会権の両方を位置づけている John Rawls の正義論をとり挙げる⁽⁷⁾ことができる。私は、この観点に基づいて仏教における社会契約論的な傾向を明らかにしたいと考えている⁽⁸⁾。

以上を明らかにした上では、本書における批判仏教の哲学的な次元の分析を問題にしておこう。この次元と深く連関するものとして、Jamie Hubbard 氏の『Topophobia』⁽⁹⁾ Paul J. Griffiths 氏の『The Limits of Criticism』⁽¹⁰⁾ 及び Lin Chen-kuo 氏(林鎮國)の『Metaphysics, Suffering, and Liberation』⁽¹¹⁾が挙げられるが、私はこの中で Griffiths 氏と Lin 氏の論文に分析を限定したい。

Griffiths 氏の論文によれば、批判仏教に関するこれまでの論争には仏教そのものとはなにかと、真理と正しさとはなにかという二つの異った理論的な領域が区別されていないことに大きな欠陥があると主張されている⁽¹²⁾。仏教とはなにかという理論的な領域には論理的側面(具体例、如来蔵思想は仏教であるか、ないか)と、倫理的側面(具体例、戦争や人種差別を肯定することが仏教的であるか、ないか)の両方が存在するのである。これに対して、真理そのもの(Truth ≡ 論理的に正しいもの)とはなにか、そして倫理性そのもの(Rightness ≡ 倫理的に正しいもの)とはなにかというもう一つの理論的領域の必然性が主張されているのである。Griffiths 氏によれば、この二つの領域を十分に区別した上で、その関

連性を明らかにすることが批判仏教の中心的な方法論的課題であるように考えられている。その意味では、批判仏教の認識論的前提を明確にすることが最も大切なことになる。以上の考察に基づいて Griffiths 氏は袴谷氏の認識論的前提である「批判の哲学」と「場所の哲学」との対立の意味の分析を行うのである。そして、この分析に基づいて internalism と externalism の認識論的区別を行い、袴谷氏の認識論的前提を問題にする立場として externalism を選ぶのである⁽¹³⁾。ここまで来ると、論理実証主義や批判的合理主義のような英米の分析哲学と縁の遠い私には十分に了解しえないものがあるが、Griffiths 氏が externalism の認識論を通して主張しようとしているものに対しては本質的に共感できるものがある。

R. Descartes の internalism を批判することによって R. Descartes の思想を M. Weber の実証主義と近いものとして見る主張には賛成できないとしても⁽¹⁴⁾、internalism の認識論は一種の foundationalism (認識の根拠を主観の内に置く認識論的立場)であるという主張には本質的な意味があると考えている⁽¹⁵⁾。もし、foundationalism とは私が問題にするところの「主観中心的な理性」と本質的に連関する概念であるとするならば、Griffiths 氏の R. Descartes 批判には私のそれと深く連関しているものがあるように考えられる。そして、この観点は、袴谷氏における「批判の哲学」の意味を問題にすることに關して本質的なものとなる。Griffiths 氏によると、袴谷氏における「批判の哲学」の主張は、独立した人間の理性に無限の能力を認める啓蒙主義の焼き直し(または、仏教の啓蒙主義的解釈)であったかのような印象を人に与えるけれども、この受けとめ方は本質的な間違いである⁽¹⁶⁾。袴谷氏の立場は、啓

蒙主義の焼き直しよりも仏教の信仰を前提とした知性の批判的使用 (the moderate externalism of a man of faith in Buddhism, critically construed, of course) であると結論している⁽¹⁷⁾。仏の言葉に對する信仰を前提とする袴谷氏の批判的知性(智慧)は認識の根拠を主観の内に置く internalism や「主観中心的な理性」と明らかに対立しているが故に私は Griffiths 氏のこの見解に對して全面的な賛意を表明したい。批判仏教の本質的な宗教性に基づいた批判的知性の性格を明確にし、そして、仏教の内外の理論的領域を厳密に分ける方法論的な指摘には大きな意味があると認めざるをえない。

以上を明らかにした上では、次に Lin 氏の論文を問題にしておこう。仏教における苦悩の問題と近代の同一性の形而上学(または、主観性の形而上学)との関係とは Lin 氏の論文の出发点である。近代とは単に人間の苦悩の新しいあり方なのか、解放的な意味のある「啓蒙主義の未完成なるプロジェクト」であるのかということとは仏教と近代との関係に關する Lin 氏の中心的な問題意識である⁽¹⁸⁾。Lin 氏は、また、三つの段階に基づいてこの問題の意味の追求を展開する。第一の段階では、苦悩の問題を近代の哲学的思弁の中に位置づけて Nietzsche, Heidegger, Adorno と Derrida に代表されるポストモダン⁽¹⁹⁾の思想を検討する。近代の苦悩を主観性の形而上学の本質的な抑圧性に由来するものとして了解することのポストモダンの思想を問題にした上では、最後に啓蒙主義の遺産の重要性を主張するのである。第二の段階では批判仏教と場所仏教との対決の問題を中心に仏教と近代との関係を主題化する⁽²⁰⁾。批判仏教の代表者として袴谷・松本二氏と共に中国仏教研究所 O'yang

Ching-wu (歐陽竟務—1871—1943) と Lü Ch'eng (呂徵—1896—1989) の名前を挙げて、場所仏教を代表するものとして京都学派の哲学者の西谷啓治及び北米の仏教学者の Malcolm David Eckel の名前を取り上げるのである。第三の段階では、仏教的な否定の弁証法を通して近代の未完成なるプロジェクトの新しい展開の可能性を指摘するのである。²²つまり、大乘仏教の〈生死即涅槃〉の思想に基づいて形而上学の克服の可能性を問題にするのである。私には、J. Habermas の批判理論とポスト=モダンの思想との対決に基づいて批判仏教と場所仏教のそれを近・現代の哲学の中で位置づけようとしている Lin 氏の努力には大きな意味があると思われる。というのも、その中で、仏教そのものを問題にする理論的領域と、その他の思想との関係を問題にする理論的領域との関連性が初めて明らかになりうると思えられるからである。それにもかかわらず、私は Lin 氏の主張に対して大きな疑問を持っている。なぜかといえば、Lin 氏の思想には J. Habermas の批判理論とポスト=モダンの思想的対立と同様に批判仏教と場所仏教との対決を二者択一的なものとして見ないで、対立そのものを高次元において会通する傾向がはつきりと見られるからである。²³ 仏教そのものの理論的領域に即していえば、Lin 氏は〈約教の二諦〉に立脚しながら〈約教の二諦〉と〈約理の二諦〉との論理的対立を二者択一的に認識しない立場に立っているように考えられる。そして、その上でこの二つの二諦観の本質的な対立をあいまいにすることによって〈約教の二諦〉の中に〈約理の二諦〉を包みこんでいる印象を私に与える。つまり、〈約理の二諦〉(形而上学?)に相対的な位置づけを与えて、そして、その上で〈約教の二諦〉の中でそれを

会通しているのである。仏教と近・現代の哲学との関係を問題にする場合には批判理論とポスト=モダンの思想との関係がそうであるように、批判仏教と場所仏教との対立を二者択一的に見ることは最も大切なものであると私には考えられる。私は、その点において Lin 氏の思想と本質的に対立しているのである。

三 仏教学的次元への分析

仏教学的次元の中心テーマとなるのは、松本氏における仏教の規定(十二因縁の時間的理解)及び如来蔵思想批判の問題である。この二点は本書におけるほとんどの反論の対象になっているのである。その意味では、この二点に対する私の見解を述べる必要がある。仏教の〈縁起〉の意味を十二因縁の時間的理解に限定する松本氏の意見に対して私は全面的に賛成しているし、縁起に対するこの規定のあり方は松本氏から教えられた最も大切な点であると考えている。この規定は、もちろん、歴史的事実に基づいたものではなく、思想的、論理的な次元において成立するものである。私はここでこの規定のあり方に対して賛成している理由を述べる余裕がないが、いづれかそれを明確にしたいと考えている。

如来蔵思想は Dhātu-vāda であり、反仏教的な思想であると主張する松本氏の批判に対しても私は全面的に賛成しているのである。けれども、漢訳『涅槃經』(南本・三十六卷本)を中心にして如来蔵思想を認識している私はこの批判の意味を少し別な観点から受けとめているのである。なぜなら、私は、如来蔵思想批判のあり方に関しては、その体験主義的性格や言葉を軽視する傾向よりも、その主張の論理的内容を重視したいと考えている。つまり、如

来蔵思想にはアートマンや靈魂を肯定する明確な主張があるといふことを重んじたのである。さらには、如来蔵とは、論証不可能なものであるが故に、如来蔵思想には体験主義的な契機が存在するといふことは当然の帰結に考えられるが、その契機よりも如来蔵思想そのものの論理的主張が本質的な問題であるといふことである。この主張を四点を以て要約できると考えているから、主張したいものを次のようにまとめる。

- (一) 仏教と如来蔵思想の双方には明確な論理的主張がある。
- (二) 仏教における論理的主張の内容は、「縁起」(無常・無我・苦)である。
- (三) 如来蔵思想における論理的主張の内容は、常・楽・我・淨なるアートマン(靈魂)を肯定するものである。
- (四) 結果的には、仏教と如来蔵思想の論理的主張の内容は正反對のものである。

以上を明らかにした上では、如来蔵思想と唯識思想との関係に關する松本氏の見解に対して一言いいたい。松本氏のこれまでの研究には、如来蔵思想と唯識思想には共通なる Dhātu-vāda 的な構造があると主張する側面と、両者の相対的な異質性を主張するもう一つの側面がある。私はインド仏教の研究者ではないのでインドにおける如来蔵思想と唯識思想との関係について厳密に論じられないが、中国・日本の仏教に限定してこの二つの思想体系の相対的な異質性の側面を重視したい。その理由として、『大乘起信論』から強い影響を受けたとされている最澄の「一乘思想」は法相宗の「五性各別説」の差別性を克服したとする日本仏教の最も欺瞞的な神話を批判したからである。よく知られているように法相宗

の思想には外境を否定する唯心論的な傾向や不変なる「真如・本来自性清淨涅槃」を肯定する発想が存在し、さらには、「五性各別説」のような差別思想があることは認めざるをえない。その意味では、法相宗の思想は如来蔵思想と共通なる Dhātu-vāda 的な構造が存在しており、その共通の構造は反仏教的思想に由来しているに違いない。問題は、「約理の二諦」に立脚している法相宗の思想は「相即」の論理を否定している限り日本における如来蔵思想の主流が主張するところの「差別即平等論」を不可能にするのである。「五性各別説」とは差別思想であるに違いないが、「相即觀」に基づいた「差別即平等論」はその差別性を克服してこなかっただけではなく、それより以上に極端な差別思想であると結論してもよろしい。私は、その意味で中国・日本で伝承された法相宗の思想の批判的克服の必然性を認めているが、その思想的な位置づけの大切さを主張したい。私に見れば、松本氏が主張するところの共通なる Dhātu-vāda 的な構造の意味は、相対的な異質性の側面との関連においてのみ明らかになり、うると考えているのである。

以上を明確にした上では、次に、本書における如来蔵思想批判への反論を分析しておこう。Sallie B. King 氏の *The Doctrine of Buddha-nature Is Impeccably Buddhist*²⁷⁾ は本書においての如来蔵思想批判に対する最初の反論となる。世親のものだとされている「仏性論」の分析に基づいている Sallie 氏の反論は次のような内容を持っている。如来蔵の概念とは確かに一種の一元論的な存在論と間違われやすい性格を持っているが、その文献的使用のあり方に即して分析されるならばそれと異った結論が出て来るのである²⁸⁾。Sallie 氏の特有の分析のあり方には思想の論理的内

容よりも言語使用のコンテキストが重んじられているように考えられる⁽²⁹⁾。この分析のあり方は、また、仏教のすべての教えを真理の直接の体験を悟らしめる〈方便〉として位置づける教法観と本質的に関連している⁽³⁰⁾。つまり、Salie氏の方法論はコンテキスト重視の解説法と教法を〈方便〉として見なす教法観によって成り立っている。Salie氏は、この方法論に基づいて『仏性論』における〈仏性〉—〈常・楽・我・浄〉等の概念使用のあり方を分析した上で、如来蔵・仏性とは一元的な存在論ではなく、一種の〈救済論的な方便〉(a soteriological device)であると結論する⁽³¹⁾。救済論的な方便である如来蔵・仏性は存在論的に中立的であるが故に仏教の〈縁起〉と矛盾しないものだ⁽³²⁾と結論するのである。『仏性論』における仏性思想成立の必然性とは虚無主義的な空理解を克服し、修道の積極的な意味をはっきりさせることにあるが故に如来蔵思想は中観思想と本質的に対立しない⁽³³⁾ということがSalie氏の根本的な立場である。私に見れば、論理的内容よりも言語使用のコンテキストを重視する解説法に対して一定の疑問を覚えざるをえないが、Salie氏の教法論にはそれよりもっと大きな問題があると考えている。〈約理の二諦〉に立脚している私からすれば、Salie氏のこうした立場は明らかに〈約教の二諦〉である。〈約教の二諦〉の正しさを主張したいとすれば論理的な手続きが必要不可欠のものとなるが、〈約教の二諦〉を自明のものにしているように見えるSalie氏にはそれらの手続きが見られない。〈約教の二諦〉に立脚した仏教思想史への了解は思想のすべてを〈方便〉として位置づけることによって論理上の対立を無意味なものとして放棄してしまうことを根本的な欠陥としているのである。その意味ではSalie

氏の方法論的前提には説得力が感じられない。如来蔵思想の分析に対しても同じことがいえる。具体例を示せば、『涅槃経』の「邪正品」には〈常・楽・我・浄〉を否定する正統仏教の〈無常・無我・苦〉の主張は二者択一的な対立の対象になっている⁽³⁴⁾。「四依品」には〈常・楽・我・浄〉を説く立場が〈了義教〉として認知されていることに対して〈無常・無我・苦〉を主張する立場が〈不了義教〉として位置づけられているのである⁽³⁵⁾。その意味では、如来蔵・仏性の概念は仏教の〈縁起〉と本質的に対立するのである。さらにいえば、同じ『涅槃経』の「四諦品」には仏教の修道論が本質的に否定されているが故に、如来蔵や仏性を修道論との関連において了解する発想は本質的な誤りであるように考えられる⁽³⁶⁾。結論的にいえば、如来蔵思想批判に対するSalie氏の反論には説得力がほとんど感じられない。なぜなら、仏教における思想的立場のすべてを〈方便〉として同質化する発想は論争を本質的に不可能なものにするからである。さらにいえば、極めて疑わしい方法論的な前提に基づいているSalie氏の如来蔵思想への了解は文献分析の側面から考えて見ても、論理的に考えて見ても根拠の乏しいものであるように考えられる。

以上を明確にした上では、次にPeter N. Gregory氏の *Is Critical Buddhism Really Critical?*⁽³⁷⁾における如来蔵思想批判への反論を検討しておこう。Gregory氏は自己の学問的立場を〈思想史〉(intellectual history)として規定した上で〈正しい仏教〉を問題にする袴谷・松本二氏のそれを〈神学的〉(theological)だと断言する⁽³⁸⁾。そして、この二つの異った立場との対話の困難さを指摘する。私に見れば、異質なる学問的立場との対話は困難なもので

あるに決っているが、この対話を成立させる条件としては、相手の方法論的立場への了解が必然的な問題になると考えられる。問題は、Gregory氏には袴谷・松本二氏の立場に対する本質的な了解が成立していると私には考えられないということである。なぜなら、袴谷・松本二氏の立場は論理的に「正しい仏教」を問題にしているのであって、歴史的な意味での「本来の仏」を問題にしているわけではないことを、同氏は本質的に理解していないように見えるからである。³⁹ 私は、信仰を前提にしない仏教の思想的な了解の有意義性を否定するつもりはないけれども、Gregory氏の思想史の方法論的前提には積極的な論理的主張を本質的に受け容れない歴史主義的、相対主義的な立場があるように見える。Gregory氏の方法論は、先述のSalie氏のそれと同じようにコンテキスト重視の解読法と、教へのすべてを「方便」として見なす立場に立脚している。⁴⁰ 問題は、Gregory氏の場合には、この方法論が、思想の論理的内容を歴史的、社会的なコンテキストの中で完全に消滅させる極端な歴史主義と相対主義まで徹底されていることである。Gregory氏は、西洋の宗教学における正邪・善悪の判別と権威主義との本質的な関連に基づいて袴谷・松本二氏の立場を批判するけれども⁴¹、私にして見れば、論理的に、または倫理的に正しいものに対する本質的な無関心が今日の社会の最も危険な傾向であると考えられる。この歴史主義的、相対主義的な傾向の問題性は、如来蔵思想に対するGregory氏の分析に具体的に表れているのである。Gregory氏は、如来蔵思想は言説否定の思想ではないと主張するけれども⁴²、私にして見ればそれは第二次的な問題に過ぎない。なぜならば、如来蔵思想はその本質においてアートマン（靈魂）の存在を積極的に主

張する思想であるところに問題があると私には考えられるからである。宗密の思想は一種の「発生論的一元論」(generative ontological monism)であることははっきりと認めている⁴³Gregory氏の主張から考えて見ても如来蔵思想はアートマン論であることを認めざるをえない。「原人論」における宗密の教判論から考えて見ても如来蔵思想はアートマン論であることは否めない。アビダルマ（小乗教）、法相宗（大乘法相教）、三論宗（大乗破相教）に対する如来蔵思想（一乘顕性教）の優越性の主張は靈魂実在論に基づいていることは『原人論』の読者の誰においても明らかであるからである。⁴⁴ 結論的にいえば、如来蔵思想批判に対するGregory氏の反論には説得力が全くないと考えられる。なぜなら、靈魂実在論を仏教として認知するところまでの極端な相対主義は批判的な学問のあり方とは縁の遠いものであると考えられるからであり、「批判」の意味から考えて見ても、相対主義とは教条主義と同様に「批判」の否定の対象でしかありえないと考えられるからである。

最後にYamabe Nobuyoshi氏の『The Idea of Dharmavada in Yogacara and Tathagata-garbha Texts』⁴⁵における如来蔵思想批判への反論を問題にしておこう。山部氏の分析は本質的に言語学的、文献学的であるので仏教の正しいあり方を主張する分析なのではない。山部氏のこうした分析の展開を評価することは私の力をはるかに超えているものであるが故に山部・松本二氏との論争の継続を期待する以外にないと考えている。山部氏の分析の展開ではなく、その結論だけを述べると、如来蔵思想は一元論的であるが差別思想なのではないことと、唯識思想の「五性各別説」は差別

思想であるけれども Dhatu-vāda の構造に基づいていないということになる。⁽⁴⁶⁾ インドの唯識思想に対して知識の全くない私には、もちろん、初期唯識思想における Dhatu-vāda との関連を論じられないが、如来蔵思想は一元論的であることを認めた山部氏から一元論とは仏教でありうるかどうかということに対する意見をいづれ聞きたいと考えている。(私は、もちろん、一元論は仏教ではありえないと考えているが……)

四 社会批判的次元への分析

如来蔵思想はその本質において差別思想であるか、ないかということは社会批判的次元の中心課題である。この課題を明らかにするために仏教学的次元(如来蔵思想は仏教であるか、ないか)と社会批判的次元(如来蔵思想は差別思想であるか、ないか)の方法論的区別は必要であると考えられる。なぜなら、如来蔵思想は仏教であるか、ないかという課題は仏教学の枠内において十分に決着可能な問題であるけれども、如来蔵思想はその本質において差別思想であるかというものの論証は、思想と現実の歴史、社会との関係と本質的に関連している課題である。その確認のために、歴史(特に社会史)との方法論的な手続きが必要不可欠のものになる。私に見れば、差別というものは政治権力によって生み出されたものであるが故に思想だけが差別の原因になることはありえないと考えている。問題は、差別を正当化する思想のあり方は思想そのものの論理的内容と本質的に関連しているものであるが故に、如来蔵思想のような自己同一性の論理と差別肯定の役割りとの関係を想定することには無理がないと考えている。歴史的に考えて見て

も、明恵の「阿留辺幾夜宇和」から清沢満之の「平等観」に至るまでの日本仏教の代表的な差別思想のすべては如来蔵思想に基づいていることは間違いない。⁽⁴⁷⁾ または、『国体の本義』における天皇制国家は如来蔵思想によって構成されていることも否めない。インド・中国等に対する分析はまだ十分に展開されていないとしても、日本仏教史に限定しておけば如来蔵思想の差別性はもつ既に論証されていると考えてよい。

以上のような前提論を明らかにした上で、次に、如来蔵思想の差別性に対する諸反論を検討しておく。Sallie B. King 氏はクエイカ教徒の〈内なる光〉と如来蔵思想を比較した上で後者における倫理性の欠落を認め、そして、その原因を指摘する。⁽⁴⁸⁾ Sallie 氏によれば、如来蔵思想におけるこの倫理性の欠落というものは、その論理的内容に由来するよりも国家の性格や日本の自民族中心主義のよきな社会的諸条件に由来しているものと主張する。⁽⁴⁹⁾ 私は、もちろん、社会的諸条件の重要性を認めているが、Sallie 氏の分析のあり方には思想の論理的内容が社会諸条件の中で完全に消滅されている印象を私に与える。この分析のあり方では、思想の論理的内容と社会諸条件との関連が問題になりえないと考えられる。この問題は Sallie 氏の仏教理解のあり方そのものと本質的に関連しているように考えられる。なぜなら、思想の論理的内容よりもコンテクストを重要視する解釈学(Hermeneutics)⁽⁵⁰⁾の解説法は後者の中に前者を消滅させる強烈な傾向を持っているからである。その意味では、Sallie 氏の反論には如来蔵思想の差別性の社会的、歴史的な位置づけよりも、社会的諸条件の内での思想内容の抹殺が成立しているように考えられる。その反論のあり方には説得力が感じられな

いことはいうまでもない。なぜなら、思想の論理的内容を抹殺することによって論争を不可能にすることは Sallie 氏の学問的方法論の最大の欠陥であるからである。Peter N. Gregory 氏の反論に対しても同じことがいえる。つまり、仏教における論理的主張の存在を否定し、社会的、歴史的な諸条件の中でそれを相対化し、消滅させる Gregory 氏の立場は論争を不可能なものとするように考えられる。歴史的、社会的な諸条件の中で思想を位置づけることは大切であるに違いないが、その位置づけは思想の論理的内容を抜きにして成立しえないと考えられるからである。

五 結び

本書は日本の仏教研究の枠を超えた批判仏教に対する初めての思想的検討である。戦争や差別のような仏教の社会倫理と深く関連する諸課題に対する関心の高さと、その貴重な方法的考察に対して高い評価が与えられるべきだと私は考えている。特に、批判仏教に内在している方法的、または哲学的な課題をこれから問題にしたい私にとっては貴重な読書であった。如来蔵思想批判に対する諸反論には論理的説得力がほとんど感じられないのは誠に残念なことであるが、私は今後、説得力のある新しい反論に基づいた論争を期待している。

注

- (1) *Pruning the Bodhi Tree — The Storm over Critical Buddhism* — University of Hawaii Press, 1997, Edited by Jamie Hubbard & Paul L. Swanson (以下 *Bodhi Tree* と略す)
- (2) この問題については Shiro Matsumoto, My Report of the Panel on “Critical Buddhism” 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第五二号を参照。
- (3) Paul L. Swanson, Why They Say Zen Is Not Buddhism: Recent Japanese Critiques of Buddha-nature, *Bodhi Tree*, pp. 27-28 を参照。
- (4) Sueki Fumihiko, A Reexamination of Critical Buddhism, *Bodhi Tree* pp. 323-326 を参照。
- (5) この問題については Jamie Hubbard, Topophobia, *Bodhi Tree*, pp. 106, 107 を参照。
- (6) この問題については Jürgen Habermas, *The Philosophical Discourse of Modernity*, The Mit Press, 1987 参照。
- (7) この問題については John Rawls, *A Theory of Justice*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1971 参照。
- (8) この思想傾向を代表する最近の研究として David J. Kalupahana, *Ethics in Early Buddhism*, University of Hawaii Press, 1995 を参照された。
- (9) *Bodhi Tree* pp. 81-112.
- (10) 同右, pp. 145-160.

- (11) 同右 pp. 298-313.
- (12) 同右 pp. 145-148.
- (13) 同右 pp. 148-157.
- (14) 同右 pp. 159-160.
- (15) 同右 pp. 154-155.
- (16) 同右 pp. 156-160.
- (17) 同右 pp. 159-160.
- (18) 同右 p. 298.
- (19) 同右 pp. 299-302.
- (20) 同右 pp. 302-307.
- (21) 同右 pp. 305-307.
- (22) 同右 pp. 298-299 及び pp. 311-313.
- (23) 同右 pp. 307-313.
- (24) この問題については、松本史朗『勝鬘経』の一乘思想について『縁起と空—如来蔵思想批判』、大蔵出版、一九八九年、三二八—三二九頁を参照。
- (25) この問題については、「仏教と神祇—反日本主義的考察」『縁起と空—如来蔵思想批判』一〇七—一〇八頁を参照。
- (26) この問題については、Dan Lusthaus, *Critical Buddhism and Returning to the Sources, Bodhi Tree* pp. 35-39 及び Lin Chen-kuo, *Metaphysics, Suffering, and Liberation: The Debate between Two Buddhisms, ibid.*, pp. 305-307 を参照。
- (27) *Bodhi Tree*, pp. 174-192.
- (28) 同右 p. 174.
- (29) 同右 p. 192.
- (30) 同右 p. 176.
- (31) 同右 pp. 184-190.
- (32) 同右。
- (33) 同右。
- (34) 大正蔵、卷二二、六四六頁上。
- (35) 同右、六四三頁上—中。
- (36) 同右、六四七頁上—中。
- (37) *Bodhi Tree*, pp. 286-297.
- (38) 同右 p. 288.
- (39) 同右 pp. 294-297.
- (40) 同右 p. 296.
- (41) 同右 p. 291.
- (42) 同右 p. 289.
- (43) 同右 pp. 287-288.
- (44) この問題については、大正蔵、卷四五、七一〇頁上を参照されたい。
- (45) *Bodhi Tree*, pp. 193-204.
- (46) 同右 pp. 203-204.
- (47) この問題については、袴谷憲昭「成仏と往生」『駒澤短期大学佛教論集』第二号、一一五—一一九頁を参照。
- (48) *Bodhi Tree*, pp. 190-192.
- (49) 同右。
- (50) 同右 p. 192.

(仏暦二五四二年(一九九八年)四月二十日)

(Jamie Hubbard & Paul L. Swanson (eds.),
*Pruning the Bodhi Tree : The Storm over
Critical Buddhism*, Nanzan Library of Asian
Religion and Culture, University of Hawaii'i
Press, Honolulu, 1997, pp. xxviii + 515)